

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## First Person Pronouns in Colloquial Style Text of the Early Meiji Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 明日子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003492">https://doi.org/10.15084/00003492</a>

## 明治初期の口語体書き言葉における一人称代名詞

近藤 明日子（人間文化研究機構推進センター / 国立国語研究所言語変化研究領域）<sup>†</sup>

### First Person Pronouns in Colloquial Style Text of the Early Meiji Period

KONDO Asuko (National Institute for the Humanities / National Institute for Japanese Language and Linguistics)

#### 要旨

明治・大正期、論説文・報道文等の実用的な書き言葉において文語体から口語体へ文体が転換するに伴い、そこで使用される一人称代名詞の語群にも通時的变化が見られる。その変化の初期の姿を明らかにするため、『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料』を資料とし、口語体書き言葉の萌芽とされる明治初期の文章における一人称代名詞の使用実態を考察した。その結果、資料ごとに使用される一人称代名詞に偏りがあり、そこから雑多な形式が混在する当時の口語体書き言葉の様相が明らかになった。

#### 1. はじめに

明治・大正期において、言文一致運動により日本語の書き言葉は文語体から口語体へと大きく転換し、それに伴って語彙にも劇的な変化が生じた。その中で、一人称代名詞の語群にも通時的变化が見られ、国立国語研究所（編）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』（短単位データ 1.2）（以下、「明治・大正編Ⅰ雑誌」と呼ぶ）を資料とした分析によりその実態が明らかにされている（近藤 2021a）。ただし、「明治・大正編Ⅰ雑誌」に収録された論説文・報道文等の実用的な書き言葉（実用文）において、口語体が普及し始める時期は明治 20 年代後半であり、それ以前の時期の口語体実用文での実態は未だ明らかではない。そこで、本研究では、明治初期の口語体資料を収録した国立国語研究所（編）（2021）『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料』（短単位データ 0.9）（以下、「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」と呼ぶ）を資料として、口語体実用文の萌芽とされる資料群における一人称代名詞の実態を明らかにし、近代書き言葉における一人称代名詞の通時的变化の更なる解明の一助としたい。

#### 2. 使用するコーパスとテキスト

本研究では、「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」に収録された 11 資料のうち、後の口語体実用文の萌芽とされる 9 資料『交易問答』（明治 2 年刊）、『開化のはなし』（明治 5 年刊か）、『文明開化』（明治 6-7 年刊）、『よりあひばなし』（明治 7 年刊）、『百一新論』（明治 7 年刊）、『開化問答』（明治 7-8 年刊）、『明治の光』（明治 8 年刊）、『文明田舎問答』（明治 11 年刊）、『民権自由論』（明治 12 年刊）を使用する。これらは明治 0 年代～10 年代にかけて刊行された資料で、開化期に西洋より輸入された思想・制度・事物について説く啓蒙書である<sup>1</sup>。その他の 2 資料『安愚楽鍋』（明治 4-5 年刊）、『春秋雑誌会話篇』（明治 5 年刊か）は

<sup>†</sup> kondo@ninjal.ac.jp

<sup>1</sup> 「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」の書誌の詳細については、近藤（2021b）を参照のこと。

幕末から明治初年にかけての話し言葉を反映した資料であり、本研究では啓蒙書の対照資料として言及する。

啓蒙書 9 資料は、文章の様式から講述体と問答体の 2 種に大きく分けることができる。講述体とは一人の講者・演者が複数の聴衆に対して行った講演・講義の筆記で、『明治の光』がそれに該当する。また、講述体には講演筆記の文体に倣って書かれた文章も含まれ、『民権自由論』がそれに該当する。一方の問答体は複数の登場人物による問いかけと答えのやり取りによって構成される文章で、『交易問答』『開化のはなし』『文明開化』『よりあひばなし』『百一新論』『開化問答』『文明田舎問答』がそれに該当する。

講述体の『明治の光』と問答体の 7 資料は口語体で書かれた会話部分を対象テキストとし、講述体の『民権自由論』は口語体で書かれた地の文を対象テキストとした。口語体か否かの区別はコーパスにアノテーションされた「文体」に拠り、会話・地の文の区別はコーパスにアノテーションされた「文章種類」に拠った。ただし、序・跋等の主要本文以外のテキストや会話文中の引用部分については、対象テキストから除外した。

### 3. 一人称代名詞の抽出

前節に示した対象テキストから一人称代名詞を抽出した。本研究では「話し手・書き手が自分自身あるいは自分自身を含む複数人を指す代名詞」を一人称代名詞とした。よって、参照代名詞等は抽出対象外とした。まず、コーパスの形態論情報を利用して、品詞が「代名詞」の短単位を抽出し、その中から一人称代名詞を抽出した。接尾辞「ら」「ども」「たち」が下接する場合はそれと結合したものを語形とした。抽出に際し、単位境界・語形等の誤りが見つかった場合はそれを修正して用例とした。さらに、一人称代名詞は話し手・書き手が自分自身のみを指す単数用法と、自分自身を含む複数人を指す複数用法とを区別した。

### 4. 単数用法の一人称代名詞

このように抽出した一人称代名詞のうち、単数用法の語形別粗頻度を資料・話者ごとに表 1 として示す。表中、語形は平仮名表記し五十音順に掲出した。資料は刊行年順に掲出した。講述体の資料での講者・演者にあたる話者には話者名の横に\*を付した（ただし『民権自由論』は地の文に単数用法の一人称代名詞の用例がなかったため表中には示していない）。これらの話者の階層は知識層と見なすことができる。そして、問答体の資料での回答者は講述体の資料での講者・演者に近い性質を持つため<sup>2</sup>、同様に\*を付した。回答者も知識層と見なすことができる。一方、質問者は知識層・非知識層あるいは階層不明が混在する。なお、話者は全員男性である。

<sup>2</sup> 特に『文明開化』と『百一新論』は、複数の登場人物による問答で構成されるのは一部分のみで、ほとんどは一人の登場人物による講述で構成されており、講述体の形式に近い。

表1 単数用法の一人称代名詞の語形別粗頻度

作品名	話者	おい ら	せ つ し ゃ	そ れ が し	ぼ く	ぼ く ら	わ し	わ し ど も	わ し ら	わ た く し	わ た く し ど も	わ た し	わ た し ど も	わ っ ち	わ っ ち ど も	わ れ ら	わ れ わ れ ど も	計
交易問答	才助*									1		7	2					10
	頑六											3	1					4
	杞愛堂先生				2													2
開化のはなし	開助*						1											1
	文明				1													1
	石部											1						1
文明開化	加藤祐一*					8											8	
百一新論	先生*		2		2													4
	或人				1													1
よりあひばなし	古琴真名備*						1	3										4
	西野語学*						3											3
	軽井弁孝				5	2												7
	呑太郎						2	4									1	7
	麦作						11	6	1									18
	片寄旧平									4	2							6
	箕神桂四郎									1						1	1	3
開化問答	開次郎*									36		5						41
	旧平									34	1	5						40
明治の光	南橋敬史*			2												33		35
文明田舎問答	文明*						3							1				4
	角兵衛													1	1			2
	旧平													2				2
	空彦							1										1
	弥八	1						1						1				3
総計		1	2	2	11	2	31	13	1	76	3	21	3	5	1	34	2	208

表1を見ると、資料ごとに使用される一人称代名詞の語形には偏りがある。以下、特に留意される資料について考察する。

まず、『文明開化』『よりあひばなし』は「わし」「わしども」を多用する。また、これら2資料は他の資料とは異なり刊行地が大阪である点が共通する。「わし」は江戸後期の上方語では男性が一般的に使用したのに対し、江戸語では勢力はあまり強くなかったとされる(祇 2008)。また、武士階級(=知識層)のこたばを反映する幕末・明治初期の英学資料では「わし」は目上から目下に対して用いるとされる(常盤 2015, pp.110-111, p.157)<sup>3</sup>。それに対して、『文明開化』『よりあひばなし』では講者・回答者である知識層が聞き手に対して丁寧な言葉遣いをする会話で使用される。

- (1) 開化に<sup>かいくわ</sup>こころざす人は、ここの<sup>べんべつ</sup>道理をよく弁別して、わしが申す事が、<sup>り</sup>理か<sup>り</sup>ふ<sup>り</sup>理かを、よくよく<sup>かんがへ</sup>考<sup>へ</sup>て見やしやれ、外国<sup>がいこく</sup>最負<sup>さいふ</sup>でいふのではない、理の当然<sup>り</sup>を申すのでム

<sup>3</sup> 祇 (2008) では明治0年代、目下から目上に対する改まった会話において「わし」の使用が見られるとするが、その話し手の階層は言及されていない。明治期の話し言葉における一人称代名詞の体系は、知識層とそれ以外の非知識層で異なっており、「わし」の待遇度も知識層と非知識層では異なっていた可能性がある。

- る、(60C 口語 1873\_04102 『文明開化』初編上 [本文]、加藤祐一)  
 (2) そりやあ先生にお尋ねなさるまでもない、わしがいふておきかせ申しましょう、(60C 口語 1874\_05102 『よりあひばなし』初編上 [本文]、西野語学)

多用され待度も異なるという、『文明開化』『よりあひばなし』での「わし」「わしども」の使用傾向は、出版地の話し言葉(上方語)の影響を考慮すべきであると考えられる。また、『よりあひばなし』は序文によれば『文明開化』の講者である加藤祐一の講釈を抄録した著作とのことで、加藤祐一の多用する「わし」が『よりあひばなし』にも反映されていることも想定される。

次に、『交易問答』は「わたし」、『開化問答』は「わたくし」を多用する。両資料とも質問者と回答者の1対1の問答で主に構成され、両者互いに敬体を用いた丁寧な言葉遣いをする。

- (3) なんと才助君。僕には一向合点の参り申さぬことがござる。(60C 口語 1869\_01102 『交易問答』上 [本文]、頑六)  
 (4) 頑六君足下ひどく交易の事をわるくいひなさが。僕には足下の理窟は一向分りません。(60C 口語 1869\_01102 『交易問答』上 [本文]、才助)  
 (5) なんと開次郎君当時の事は一向僕には合点が参りません(『開化問答』旧平)  
 (6) また足下は是までの武士を大そう役に立た物のやうにいひなさが僕の考へでは同じ二本ざしなら焼豆腐の方がはるかましだと思ひ升(『開化問答』開次郎)

『安愚楽鍋』『春秋雑誌会話篇』では「わたくし」「わたし」が敬体の丁寧な会話で使用されており、『交易問答』『開化問答』の使用実態と一致する。当時の話し言葉で実際に使用される一人称代名詞の語形を使用した、話し言葉の性質の強い問答体の1形式が『交易問答』『開化問答』であると言える。

ところで、「明治・大正編 I 雑誌」に収録される同時期の雑誌『明六雑誌』(明治7-8年刊)には、地の文に一人称代名詞を使用する口語体の評論が3記事収録されており、そのうち1記事で「私し」「私」(語形は「わたくし」あるいは「わたし」と推定される)が使用される。

- (7) 前おきは無用の7ながら私し初ての7でござりますから申します私は阪谷素と申します色が黒い正直な鈍物でござります(60M 明六 1875\_27002 「民選議院變則論(一)」阪谷素)

また「明治・大正編 I 雑誌」の収録雑誌『国民之友』(明治20-21年刊)では、地の文に一人称代名詞を使用する口語体の評論が3記事収録されており、そのうち2記事で「私」が使用される。

- (8) けれども此の度の郡部會の所爲に對して、果して、之を中止し及び解散するの必要が、有るか無いかと、云ふことに至りましては、學問上の研究を離れます。然れば、私の言ふべき事柄では有りませぬ。(60M 国民 1888\_19004 『国民之友』「議會中止解散のことを講じ併せて兵庫縣郡部會解散のことを論ず」宇川盛三郎)

- (9) 申すも甚だお恥かしい次第ですが私は露國の小説は譯本でもまだ讀んだ事がありませぬ況して原本は……二葉亭先生の「あひびき」が臍の緒切ツて始めてです、(60M 国民 1888\_30013 『国民之友』「あひびき」を讀んで……) 石橋思案)

『明六雑誌』『国民之友』ともに「私し」「私」は敬体の丁寧な文体で使用されており、『交易問答』『開化問答』と共通する。数少ない『明六雑誌』『国民之友』の実例から推測するに、明治半ばまでの口語体実用文は敬体を使用する話し言葉の性質の強い文章が主であり、そこで使用される一人称代名詞の語形は、話し言葉での待遇度に対応して「私」(「わたくし」あるいは「わたし」)が主であったと考えられる。その一つの源流が『交易問答』『開化問答』のような問答体の1形式に見出されると言える。

次に、『明治の光』は「われら」を多用する。

- (10) <sup>われら</sup>も本より素人なるが些<sup>し</sup>手前味噌<sup>を</sup>揚げる様なれども若<sup>わか</sup>ひ時<sup>とき</sup>より色<sup>いろ</sup>との青標紙<sup>あをびょうし</sup>や黒<sup>くろ</sup>ひ文字<sup>もじ</sup>を見<sup>み</sup>覚<sup>おぼ</sup>へたる事<sup>こと</sup>も候<sup>し</sup>へば白<sup>しろ</sup>ひ中<sup>ちゆう</sup>にも少<sup>あほ</sup>しづつ青<sup>あお</sup>み黒<sup>くろ</sup>みを染<sup>そ</sup>め合<sup>あ</sup>はせ真<sup>ま</sup>の黄<sup>きいろ</sup>色<sup>いろ</sup>にでは覚<sup>おぼ</sup>えなく候<sup>し</sup>へど鼠<sup>ねづ</sup>色<sup>いろ</sup>位<sup>くらい</sup>の男<sup>おとこ</sup>かと自分<sup>じぶん</sup>勝手<sup>か</sup>つて目<sup>め</sup>利<sup>き</sup>致<sup>いた</sup>して居<sup>お</sup>り升<sup>あ</sup> (60C 口語 1875\_08102 『明治の光』一 [本文]、南橋散史)
- (11) 自主自由<sup>しゆじしゆじゆ</sup>と申<sup>ま</sup>文字<sup>もじ</sup>を碎<sup>くだ</sup>ひて見<sup>み</sup>るに自<sup>じ</sup>は自分<sup>じぶん</sup>主<sup>しゆ</sup>は主<sup>しゆ</sup>じ由<sup>ゆう</sup>はよると訓<sup>く</sup>ずどふも是<sup>こ</sup>れ丈<sup>だけ</sup>にては中<sup>なか</sup>と御<sup>お</sup>分<sup>わか</sup>りに成<sup>な</sup>り兼<sup>かね</sup>升<sup>あ</sup>ふ我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>よく譬<sup>たとへ</sup>を取<sup>と</sup>りて咄<sup>はな</sup>し升<sup>あ</sup>ふ (60C 口語 1875\_08103 『明治の光』二 [本文]、南橋散史)

『安愚楽鍋』『春秋雑誌会話篇』では「われら」の用例は単数用法・複数用法ともになく、当時の話し言葉では「われら」は活発には使用されなかった語形と考えられる<sup>4</sup>。一方、同時期の『明六雑誌』では文語体で使用される例が見られる。

- (12) 今更に千萬テールの償金を得るも外交條約より政體萬事十分意の如くなるも若し風習品行悪るき時は根の無き花源なき水にて一時外面を飾る而已にて前言の衰運を促し禍基を崇くするに<sup>レ</sup>なりはせぬかと我等<sup>われら</sup>は心配するなり (60M 明六 1874\_25002 『明六雑誌』「政教の疑 (二)」阪谷素)

よって、当時「われら」は文語体でも使用できる程度に改まった語形であったと推定される。『明治の光』の例文中に「候ふ」が使用されていることから分かるように、講者・南橋散史の言葉遣いは文語体を交えた日常会話とは異なるものである。これが当時の講演の言葉遣いそのままであるのか、筆記の過程を経ることで書き言葉的要素が混入したのかは、別途考える必要があるが、日常会話ではあまり使用されない語形を交えた書き言葉的要素の強い講述体が存在したことを示すものと言える。

<sup>4</sup> 他に、『西洋道中膝栗毛』(明治3-9年刊)を対象資料とする佐藤(2005)、『富士額筑波繁山』(明治10年初演)を対象資料とする杉本(1965)には「われら」について言及がない。明治期の小説24作品を対象資料とする祇(2007)では、採集した複数形327例のうち「われら」は14例あったとの報告がある。ただし、使用される作品の年代や話者属性・待遇度等については言及がなく、明治初期の「われら」の使用実態の詳細は不明である。

最後に、『文明田舎問答』は「わし」「わっち」を多用する。回答者の文明は質問者に対して、打ち解けた仲間内の言葉遣いをし、そのような会話中に「わし」「わっち」は出現する。

- (13) かう聞ねへ鉄道に付、拙が腰折を一首よんだは (60C 口語 1878\_09102『文明田舎問答』初編 [本文]、文明)
- (14) いやそりやあもう大造いい理屈があるわ、然し愚などが文盲では、精しくは知らねへが、ちよつくり聞かぢつた処を、かいつまんだ咄がかうだ、(60C 口語 1878\_09102『文明田舎問答』初編 [本文]、文明)

ここまで見てきた他の啓蒙書のように、講者や回答者が改まった言葉遣いをするのではなく、『文明田舎問答』のようなくだけた言葉遣いをする問答体もあったことが分かる。その題名からも分かるように田舎を舞台とするところに趣向のある作品であるから、田舎らしさを醸し出す言葉遣いを登場人物にさせているのかもしれない。

### 5. 複数用法の一人称代名詞

次に複数用法の一人称代名詞の語形別粗頻度を、資料・話者（『民権自由論』は著者）ごとに表2として示す。表の形式は表1と同様である。

表2 複数用法の一人称代名詞の語形別粗頻度

作品名	話者	わ			計
		わし	われ	われ	
開化のはなし	開助*		3		3
	頑兵衛		1		1
文明開化	加藤祐一*		3		3
よりあひばなし	麦作			1	1
開化問答	開次郎*		6		6
	旧平		3		3
文明田舎問答	文明*		4		4
	空彦		1		1
民権自由論	植木枝盛*		2		2
総計		1	22	1	24

表2から明らかなように、主に使用される複数用法の語形は「われわれ」である。知識層が丁寧な会話・文章で使用する用例が主だが、『文明田舎問答』の文明のくだけた会話にも用例がある。

- (15) 何故といふに先刻から口が酸くなるほど御話申通り今天子様の御政事を施し給ふは皆民百姓我との為でござる (『開化問答』、開次郎)
- (16) さあ徴兵がとつと此道理で、細ひが大ひ日本は、吾輩三千三百余万の居処乃ち居村ぢや、(60C 口語 1878\_09102『文明田舎問答』初編 [本文]、文明)

- (17) <sup>これ</sup>是は<sup>せんじん</sup>先人<sup>がうけつ</sup>豪傑<sup>とて</sup>今より<sup>いま</sup>先の人<sup>さき</sup>立<sup>ひとだち</sup>が<sup>しんく</sup>辛苦<sup>かんなん</sup>艱難<sup>あせ</sup>汗<sup>みだ</sup>を出し<sup>ほね</sup>骨<sup>お</sup>を折<sup>われ</sup>りて。そうして<sup>われ</sup>吾々<sup>ゝ</sup>  
<sup>とうこん</sup>當今<sup>ひと</sup>の人<sup>ひと</sup>に<sup>くだ</sup>下<sup>たま</sup>し<sup>は</sup>賚<sup>は</sup>つた<sup>で</sup>ご<sup>ご</sup>ざる (60C 口語 1879\_10102 『民権自由論』〔本文〕、植  
 木枝盛)

『安愚楽鍋』には1例「われわれ」があり、「ござります」に相当する丁重度の高い文末辞「ごす」「げす」を使用する会話で使用される。話者の男の階層は不明であるが、「げす」は「江戸末期から明治にかけて、芸人や通人・職人の間で用いられることが多かった」（小学館『日本国語大辞典 第二版』「げす」項）語であることから、非知識層に属する人物と見られる。

- (18) <sup>おひ</sup>追<sup>わが</sup>と<sup>ぶんめい</sup>我國<sup>い</sup>も<sup>くわ</sup>文明開化<sup>い</sup>と号<sup>い</sup>つて<sup>ひら</sup>ひら<sup>けて</sup>き<sup>や</sup>し<sup>た</sup>から<sup>われ</sup>我<sup>く</sup>と<sup>ま</sup>まで<sup>が</sup>喰<sup>ふ</sup>や<sup>う</sup>にな<sup>つ</sup>た<sup>の</sup>  
 は<sup>じつ</sup>実<sup>に</sup>あり<sup>が</sup>たい<sup>わ</sup>け<sup>で</sup>ご<sup>ご</sup>す (60C 口語 1871\_02102 『安愚楽鍋』初編 〔本文〕、  
 男)

『よりあひばなし』では農民の麦作にも「われわれども」の使用がみられ、明治初期において「われわれ」は知識層だけでなく非知識層にも使用された語形であったと見られるが、その頻度は知識層と比較してどの程度であったか不明である。

「明治・大正編 I 雑誌」収録の『明六雑誌』（明治 7-8 年刊）、『東洋学芸雑誌』（明治 14-15 年刊）では文語体・口語体どちらの実用文の地の文中でも「われわれ」の用例は見出されない<sup>5</sup>。「われわれ」は当時の書き言葉ではほとんど使用されなかった語形であったと考えられる。よって、講述体・問答体での「われわれ」の使用は、その話し言葉の性質を示すものであると言える。

## 6. おわりに

以上、『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料』を資料として、明治初期の口語体で書かれた啓蒙書に使用される一人称代名詞について考察した。同じ啓蒙書とは言え、資料の文章形式や出版地による特性によって、特に単数用法の一人称代名詞の語形には資料ごとに傾向のあることが明らかになった。本コーパスを使用する際にはこの各資料特性に留意する必要があることが示唆される。

明治初期の口語体書き言葉は、話し言葉の性質を強く持ちながら、書き言葉の性質のある要素も含みつつ、雑多な形式が併存するものであった。以降、徐々に形式が整理されて明治後期以降の口語体書き言葉に収斂していったものと考えられる。その通時的変化の具体的様相を明らかにするには、コーパスには収録の少ない明治 10 年代から 20 年代前半の口語体実用文の資料を対象とした考察が必要である。今後の課題としたい。

## 謝 辞

本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」、科研費 JP21K00552「拡張した近代語コーパスを使用した口語体実用文の成立過程の計量的研究」の研究成果の一部である。

<sup>5</sup> 『東洋学芸雑誌』「非時事小言論（三）」（60M 東洋 1882\_06004、上田秀成）に引用される福澤諭吉著『時事小言』（明治 14 年刊）に「われわれ」1例が見られるが、本稿執筆時点で『時事小言』原文は未確認である。



文 献

- 祇福鼎 (2007) 「明治時代語における自称詞の複数形について」『明治大学日本文学』33, pp.54(9)-42(21)
- 祇福鼎 (2008) 「明治時代語における自称詞「わし」と「わっち」」『文学研究論集』28, pp.135-150
- 国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』(短単位データ 1.2) [https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji\\_taisho.html#zasshi](https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi)
- 国立国語研究所 (2021) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 III 明治初期口語資料』(短単位データ 0.9) [https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji\\_taisho.html#shokikogo](https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shokikogo)
- 近藤明日子 (2021a) 『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』勉誠出版
- 近藤明日子 (2021b) 「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 III 明治初期口語資料』(短単位データ 0.9) 概説書」<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/doc/abstract-shokikogo-202103.pdf>
- 佐藤武義 (2005) 「『万国航海西洋道中膝栗毛』の二著者の用語」近代語研究会 (編) 『日本近代語研究 4』ひつじ書房, pp.45-68
- 杉本つとむ (1965) 「転換期の日本語—江戸から東京へ—」近代語学会 (編) 『近代語研究 第一集』武蔵野書院, pp.305-324
- 常盤智子 (2015) 『英学会話書の研究』武蔵野書院